

原 著

口唇口蓋裂患者の顔貌に対する満足度と心理社会機能

竹田 彰 黒江和斗 伊藤学而

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻発生発達成育学講座顎顔面育成学分野

TAKEDA Akira, KUROE Kazuto and ITO Gakuji

Department of Orthodontics, Field of Developmental Medicine, Course of Health Research, Kagoshima University
Graduate School of Medical and Dental Sciences

キーワード：口唇口蓋裂患者，顔貌，満足度，心理社会機能

抄録：口唇口蓋裂患者が持つ顔貌に対する満足度が心理社会機能に及ぼす影響を解析するため，鹿児島大学歯学部附属病院矯正科の口唇口蓋裂患者のうち Thomas ら (97) に準じて 10, 15, 20 歳群の各 32, 21, 17 名と，10 歳群と 15 歳群の保護者各 31 名と 19 名についてアンケート調査を行った。

20 歳群の患者では 10 歳群の患者より歯に対する満足度が高く，顎裂部の腸骨移植や矯正治療による前歯部咬合の改善が満足度を高めたものと考えられた。15 歳群の保護者では 10 歳群の保護者より口唇と鼻に対する満足度が高く，前者では口唇修正術や顎裂部の腸骨移植による口唇と鼻翼基部の改善が満足度を高めたものと考えられた。患者と保護者の比較では，鼻に対する満足度が 15 歳群の患者に比べて保護者の方が高く，関心をよせる部位が両者で違っていたと推察される。

顔貌に対する満足度と心理社会機能には有意な相関がなく，心理社会機能に影響を及ぼす自己価値が関与しているためと考えられる。

(Orthod Waves 62(5) : 356~368, 2003)

**Satisfaction with facial appearance and
psychosocial functioning in patients
with cleft lip/palate**

Abstract : To analyze the effects of satisfaction with facial appearance in patients with cleft lip/palate on their psychosocial functioning, the questionnaire sur-

vey according to Thomas *et al.* (97) was executed in 10-years-old (n=32), 15-years-old (n=21) and 20-years-old (n=17) patients groups and their parents of 10-years-old patients (n=31) and those of 15-years-old patients (n=19) of Department of Orthodontics, Kagoshima University Dental Hospital.

20-years-old patients showed higher satisfaction with their teeth than 10-years-old patients, the reason might be that the transplantation of iliac bone into the alveolar cleft and the occlusal improvement of anteriors enhanced the satisfaction. Parents of 15-years-old group showed higher satisfaction with their children's lip and nose than those of 10-years-old group, the reason might be that the improvement of lips and base of ala nose after the cheiloplastics and the transplantation of iliac bone into the alveolar cleft enhanced the satisfaction. Parents of 15-years-old patients showed higher satisfaction with their children's nose than the patients. This might suggest that the interest in facial appearance differs in parents and their children.

However, no significant correlation was found between the satisfaction with facial appearance and the psychosocial functioning in any age groups. Beside the facial appearance, the self esteem might influence on the psychosocial functioning.

(Orthod Waves 62(5) : 356~368, 2003)

緒 言

幼時に口唇と口蓋の形成術を受けた永久歯列期の口唇口蓋裂患者では、中顔面の陥凹、上顎歯列弓の狭窄¹⁾、歯の形態や位置および数の異常を伴う歯列不正^{2,3)}、口唇の瘢痕と口唇や鼻翼の変形^{4~6)}などのために、鼻、口唇、歯、発音に対する満足度が低いとされている⁷⁾。ただし、保護者の満足度は、患者より低いこともあれば⁸⁾、高いこともある⁷⁾。

また、学童期や思春期の口唇口蓋裂患者の心理社会機能は低く^{9,10)}、顔貌に対する劣等感が社会生活に影響を及ぼし¹¹⁾、特に口唇に大きな瘢痕がある者では心理社会機能が低いとされている¹²⁾。

Thomas ら¹³⁾は、英国の 10、15、20 歳の 3 群の口唇口蓋裂患者の歯、口唇、鼻、顔つきの満足度を合計して顔貌に対する満足度を求めたところ、20 歳群で有意に高く、しかも 10 歳、15 歳群では顔貌に対する満足度と心理社会機能に有意な相関があったとしている。

本研究では、Thomas らの調査結果を追試するため、鹿児島大学歯学部附属病院矯正科の口唇口蓋裂患者と保護者に対して彼らと同じアンケート調査を行い、顔貌に対する満足度の年齢変化とともに、患者の心理社会機能との関連を調べた。

対象と方法

I. 対 象

対象は、鹿児島大学歯学部附属病院矯正科の口唇口蓋裂患者のうち、2000 年 7 月～10 月までの調査時に、Thomas ら¹³⁾に準じて 9～10 歳であった 32 名 (10 歳群)、14～15 歳であった 21 名 (15 歳群)、および 19～20 歳であった 17 名 (20 歳群) と、10 歳群と 15 歳群の保護者 31 名と 19 名である (表 1)。ただし対象には、口唇口蓋裂以外の顎顔面の先天異常や精神発達遅滞がなく、調査に対して本人と保護者の同意が得られた者のみを選んだ。

表 2 に、対象患者の裂型別内訳を示す。対象には、Thomas ら¹³⁾に準じて上顎歯列の Collapse などにより顔貌へ影響を及ぼしている可能性のある口蓋裂患者も含めたが、その数は 10 歳群 4 名 (13%)、15 歳群 8 名 (38%)、20 歳群 2 名 (12%) で彼らとほぼ同じ割合であった。

なお、口唇形成術は、片側性の者では生後 3～6 か月時に、両側性の者では生後 3～5 か月時と 7～14 か月時に行われていた。また、口唇修正術は 24 名の者で 1 歳 8 か月～17 歳時に行われ、年齢群別内訳は 10 歳群に 13 名、15 歳群に 7 名、20 歳群に 5 名であった。口蓋形成術は、すべて生後 1～2 歳時に行われていた。顎裂部

表 1 対象の人数

	10 歳群			15 歳群			20 歳群		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
患 者	15	17	32	8	13	21	12	5	17
保 護 者	15	16	31	7	12	19	—	—	—

表 2 対象患者の裂型別内訳

	唇顎口蓋裂	唇顎裂	口蓋裂	合計
10 歳群	20 (62)	8 (25)	4 (13)	32 (100)
15 歳群	10 (48)	3 (14)	8 (38)	21 (100)
20 歳群	5 (29)	10 (59)	2 (12)	17 (100)

() は %

表 3 顔貌に対する満足度の調査表

調査項目	不満足							満 足
歯に対して	1	2	3	4	5	6	7	
口唇に対して	1	2	3	4	5	6	7	
鼻に対して	1	2	3	4	5	6	7	
顔つきに対して	1	2	3	4	5	6	7	

Cleft Satisfaction Profile (Thomas *et al.*, 1997) に
よる

への骨移植術は 32 名の者で 7～15 歳時に行われ、年齢群別内訳は 10 歳群 17 名、15 歳群 7 名、20 歳群 8 名であった。また、鼻修正術は 3 名の者で 15～18 歳時に行われ、年齢群別内訳はすべて 20 歳群であった。

II. 方 法

1. アンケート調査

顔貌に対する満足度のアンケート調査は、すべての患者と保護者に対して Thomas らの Cleft Satisfaction Profile¹³⁾の設問を日本語に翻訳し、歯、口唇、鼻、顔つきの 4 項目についてそれぞれの満足、不満足を 7 段階の主観的順位尺度のスコアで回答させた (表 3)。

心理社会機能のアンケート調査は、10 歳群と 15 歳群の患者に対して Childhood Experience Questionnaire¹⁴⁾の設問を日本語に翻訳し、「集会やパーティーに行く」、「けんかをする」、「学校では友達と一緒にいる」などの社会生活に関する 20 項目についてそれぞれ「全くない」から「よくある」までを 5 段階で回答させ、心理社会機能が高いものをスコア 5 とする Likert スケールで回答させた (表 4)。

どちらのアンケート調査も、患者と保護者を分けて著者の一人が面接形式で行った。ただし、調査者は事前に心理学者から面接調査に対する指導を受け、患者および保護者に対して十分なラポールをとって非誘導的

表 4 心理社会機能の調査表

調査項目	全くない	ほとんどない	ときどきある	しばしばある	よくある
1. 集会やパーティーに行く	1	2	3	4	5
2. けんかをする	5	4	3	2	1
3. 学校では友達と一緒にいる	1	2	3	4	5
4. いじめられる	5	4	3	2	1
5. 夜、友達と過ごす	1	2	3	4	5
6. 友達に一番に声をかけられる	1	2	3	4	5
7. 皆がかけて私を笑いものにする	5	4	3	2	1
8. 私の周りに友達がいる	1	2	3	4	5
9. 近所の友達と一緒に遊ぶ	1	2	3	4	5
10. ほとんどの時間をテレビを見て過ごす	5	4	3	2	1
11. 人目を避けようとする	5	4	3	2	1
12. 皆が私を可哀相と思っている	5	4	3	2	1
13. 家族と一緒に買い物に行く	1	2	3	4	5
14. 友達に最後に声をかけられる	5	4	3	2	1
15. 自分の殻にこもる	5	4	3	2	1
16. 知らない所へ行く	1	2	3	4	5
17. 皆が私をじろじろ見る	5	4	3	2	1
18. 初対面の人と会う	1	2	3	4	5
19. 学校へ行かなくてもすむように病気の ふりをする	5	4	3	2	1
20. 遊びや催しを企画する	1	2	3	4	5

Childhood Experience Questionnaire (Pertschuk, 1982) による

に行った。調査時に来院できなかった 20 歳群の患者 9 名には、アンケート調査用紙を郵送して回答を求めた。

2. 検定

顔貌に対する満足度について、保護者の年齢群間、患者と保護者との比較、および口唇裂の有無の比較は Mann-Whitney U test で検定した。患者の年齢群間の比較は Kruskal-Wallis test で検定し、Post-Hoc test として Scheffe による多重比較検定を行った。顔貌に対する患者の満足度と心理社会機能との相関は Spearman の順位相関で検定した。

3. 前歯、口唇、鼻、顔つきの状況

各年齢群の 1) 前歯の被蓋、配列、2) 口唇、3) 外鼻、4) 顔つきの状況について、口腔内写真 (図 1-1~3) と顔面写真 (図 2-1~3) を用いて 3 段階の程度に分類した (表 5)。

結 果

I. 顔貌に対する満足度

顔貌に対する満足度の比較を、口腔内写真 (図 1-1~3) と顔面写真 (図 2-1~3) と表 6 に示す。

1. 患者の満足度

歯に対する満足度は、10 歳群に対して 15 歳群、20 歳群で年齢とともに高くなり、20 歳群は 10 歳群に比べて有意に高い。しかし、口唇、鼻、顔つきに対する満

足度は、各年齢群で有意差がない。

2. 保護者の満足度

歯に対する満足度と顔つきに対する満足度では、10 歳群の保護者と 15 歳群の保護者で有意差がない。

一方、口唇に対する満足度は、10 歳群の保護者に対して 15 歳群の保護者が有意に高い。

鼻に対する満足度は、10 歳群の保護者に対して 15 歳群の保護者が有意に高い。

3. 患者と保護者の満足度の比較

鼻に対する満足度は、15 歳群の患者に対して保護者が有意に高いが、10 歳群では有意差がない。歯、口唇、顔つきに対する満足度はいずれの年齢群でも有意差はない。

4. 口唇裂の有無と顔貌に対する満足度

口唇裂の有無による満足度の比較を表 7 に示す。患者、保護者、いずれの年齢群にも有意差がない。

II. 心理社会機能

顔貌に対する患者の満足度と心理社会機能との相関を表 8 に示す。顔貌に対する患者の満足度と心理社会機能との間には、10 歳群、15 歳群ともに有意な相関がない。

III. 前歯、口唇、鼻、顔つきの状況

前歯、口唇、鼻、顔つきの状況を図 1-1~3、2-1~3、

図 1-1 患者の満足度：10 歳群の口腔内写真

表 5 に示す。

1. 前歯の被蓋，配列

前歯被蓋については，正被蓋が 10 歳群で 25%，15 歳群で 66%，20 歳群で 76%，切端咬合が 10 歳群で 56%，15 歳群で 24%，20 歳群で 18%，逆被蓋が 10 歳群で 19%，15 歳群で 10%，20 歳群で 6%であった。

前歯配列については，叢生なしかわずかな叢生が 10

歳群で 3%，15 歳群で 47%，20 歳群で 76%，中等度の叢生が 10 歳群で 53%，15 歳群で 24%，20 歳群で 24%，重度の叢生が 10 歳群で 44%，15 歳群で 29%，20 歳群で 0%であった。

歯列の正中線については，上下顎の正中線が一致が 10 歳群で 31%，15 歳群で 62%，20 歳群で 76%，下顎の正中線が半歯以下のずれが 10 歳群で 25%，15 歳群

図 1-2 患者の満足度：15 歳群の口腔内写真

で 33%, 20 歳群で 18%, 下顎の正中線が半歯以上のずれが 10 歳群で 44%, 15 歳群で 5%, 20 歳群で 6%であった。

2. 口唇

上唇のキューピッド弓については, 良好が 10 歳群で 25%, 15 歳群で 52%, 20 歳群で 30%, わずかな変形が 10 歳群で 44%, 15 歳群で 29%, 20 歳群で 35%, 目立つ変形が 10 歳群で 31%, 15 歳群で 19%, 20 歳群で 35%であった。

上唇の対称性については, 対称が 10 歳群で 28%, 15 歳群で 43%, 20 歳群で 35%, わずかな非対称が 10 歳群で 56%, 15 歳群で 33%, 20 歳群で 41%, 非対称が 10 歳群で 16%, 15 歳群で 24%, 20 歳群で 24%であった。

上唇の癍痕については, 目立たないが 10 歳群で 37%, 15 歳群で 42%, 20 歳群で 18%, わずかな癍痕があり 10 歳群で 44%, 15 歳群で 48%, 20 歳群で

53%, 目立つ癍痕があり 10 歳群で 19%, 15 歳群で 10%, 20 歳群で 29%であった。

3. 外鼻

鼻尖の形態については, 良好が 10 歳群で 34%, 15 歳群で 62%, 20 歳群で 70%, わずかな扁平が 10 歳群で 34%, 15 歳群で 33%, 20 歳群で 24%, 扁平が 10 歳群で 32%, 15 歳群で 5%, 20 歳群で 6%であった。

鼻翼の形態については, 良好が 10 歳群で 38%, 15 歳群で 57%, 20 歳群で 47%, わずかな非対称が 10 歳群で 38%, 15 歳群で 19%, 20 歳群で 53%, 非対称が 10 歳群で 24%, 15 歳群で 24%, 20 歳群で 0%であった。

4. 顔つき

顔つきについては, 良好が 10 歳群で 32%, 15 歳群で 29%, 20 歳群で 53%, わずかな中顔面の陥凹とオトガイの突出が 10 歳群で 34%, 15 歳群で 52%, 20 歳群で 29%, 高度な中顔面の陥凹とオトガイの突出が 10 歳群で 34%, 15 歳群で 19%, 20 歳群で 18%であった。

図 1-3 患者の満足度：20 歳群の口腔内写真

考 察

I. 顔貌に対する満足度

1. 患者の満足度

5～18 歳の口唇口蓋裂患者では、自身の顔貌全体に対して特に不満はないといわれている⁸⁾。しかし、16～25 歳の片側性唇顎口蓋裂患者では歯に対して 14.3%が不満足を持ち、口唇あるいは鼻に対してそれぞれ 35.7%、46.4%が不満を持つという⁷⁾。

Thomas ら¹³⁾によれば、顔貌に対する口唇口蓋裂患者の満足度は 10 歳群と 15 歳群に比べて 20 歳群で有意に高く、外科手術や矯正治療による顔貌の改善と成長による顔貌の変化とが良好な影響を与えたと考えている。本研究では、Thomas らの方法に準じて歯、口唇、鼻、顔つきの 4 項目に対する満足度を年齢群間で比較し、さらに心理社会機能との関連を調べた。また、患

者の各年齢群の口腔内写真と顔面写真から前歯、口唇、外鼻、顔つきの状況を調べた。

なお、日本における口唇口蓋裂に対する手術方法や手術時期、患者をとりまく社会文化的背景は欧米と異なることから、本研究では Thomas らの結果と比較検討は行わなかった。

1) 歯に対する満足度

歯に対する満足度は、10 歳群の患者に比べて 20 歳群の患者が有意に高かった(表 6, 図 1-1～3)。前歯の被蓋、配列の状況についても年齢群が上がるにつれて改善していた(表 5, 図 1-1～3)。

10 歳群の患者は側方歯群交代期にあり、中切歯の捻転、側切歯の欠損、犬歯の萌出障害などにより前歯部の不正が多いが、顎裂部の腸骨移植や矯正治療による前歯部咬合の改善が 20 歳群での患者の歯に対する満足度の向上につながったものと考えられる。

図 2-1 患者の満足度：10 歳群の顔面写真

図 2-2 患者の満足度：15 歳群の顔面写真

2) 口唇に対する満足度

口唇に対する満足度には、各年齢群で有意差がなかった(表 6, 図 2-1~3)。しかし、口唇の形態が良好な者は 15 歳群が 10 歳群と 20 歳群に比べて多かった(表 5, 図 2-1~3)。15 歳群の口唇の形態が良好であったにも関わらず、患者の満足度には年齢群間で差がなかったのは、15 歳群の患者の満足度が低かったものと考えられる。この理由として、16~25 歳の片側性唇顎口蓋裂患者では歯よりも口唇あるいは鼻に対する不満が強い⁷⁾、思春期には顔貌を気にする程度が強まる⁹⁾ことや、顔貌の満足度を決定する要因の中でも鼻や口唇の形、傷跡の寄与度が大きい¹⁵⁾ことが影響していると考えられる。なお、15 歳群の口唇の形態が良好であった者が多かった理由は不明である。

3) 鼻に対する満足度

鼻に対する満足度には、各年齢群で有意差がなかった(表 6, 図 2-1~3)。しかし、鼻の形態が良好な者は

年齢群が上がるにともない多くなっていた(表 5, 図 2-1~3)。鼻翼の形態は年齢群が上がるにともない良好になったにも関わらず、患者の満足度には年齢群間で差がなかったのは、15 歳群、20 歳群の患者の満足度に向上がみられなかったものと考えられる。この理由として、思春期には顔貌を気にする程度が強まること⁹⁾、20 歳前後の口唇口蓋裂患者は鼻に不満が集中すること⁷⁾が影響していると考えられる。

4) 顔つきに対する満足度

顔つきに対する満足度には、各年齢群で有意差がなかった(表 6, 図 2-1~3)。しかし、顔つきの良好な者は 20 歳群が 10 歳群と 15 歳群に比べて多かった(表 5, 図 2-1~3)。顔つきについては年齢群が上がるに伴い良好になったにも関わらず、患者の満足度には年齢群間で差がなかったのは、20 歳群の患者の満足度が低かったものと考えられる。この理由として、思春期には顔貌を気にする程度が強まる⁹⁾ことが影響している

図 2-3 患者の満足度：20 歳群の顔面写真

と考えられる。

2. 保護者の満足度

Thomas ら¹³⁾によれば、顔貌に対する 15 歳群の患者の満足度は保護者に比べて有意に低く、顔貌に対する患者の不安は思春期に増大するためとしている。

本研究では、歯に対する保護者の満足度は 10 歳群と 15 歳群で差がなかったが(表 6, 図 1-1, 1-2), 前歯の被蓋, 配列の状況は 10 歳群より 15 歳群で高くなっていた(表 5, 図 1-1, 1-2)。前歯の被蓋や配列の状況は、年齢群が上がるに伴い改善しているにも関わらず保護者の満足度に患者の年齢による差がなかったことは、歯に対する保護者の関心が低いことを示唆するものと考えられる。

口唇に対する保護者の満足度は、10 歳群の保護者に比べて 15 歳群の保護者が有意に高かった(表 6, 図 2-1, 2-2)。口唇の状況も 10 歳群に比べて 15 歳群で口唇の形態が良好な者が多かった(表 5, 図 2-1, 2-2)。こ

れは、前歯の被蓋や配列の改善、口唇修正術による形態改善が好影響を及ぼしていたものと考えられる。口唇に対する保護者の満足度と口唇の状況は、一致して年齢群が上がるに伴って高くなっていたが、これは保護者が口唇の改善の状況を認識していたことを示唆している。

鼻に対する保護者の満足度は、10 歳群に比べて 15 歳群が有意に高かった(表 6, 図 2-1, 2-2)。外鼻の状況でも 10 歳群に比べて 15 歳群で鼻翼や鼻尖の形態が良好な者が多かった(表 5, 図 2-1, 2-2)。これは、顎裂部への骨移植や口唇修正術などによる鼻翼形態の改善が好影響を及ぼしたものと考えられる。鼻に対する保護者の満足度と外鼻の状況は一致して年齢群が上がるに伴って高くなっていたが、これは保護者が鼻の改善の状況を認識していたことを示唆している。

顔つきに対する保護者の満足度は、10 歳群と 15 歳群で差がなかった(表 6, 図 2-1, 2-2)。また、顔つき

表 5 前歯, 口唇, 外鼻, 顔つきの状況

	10 歳群 (n=32)	15 歳群 (n=21)	20 歳群 (n=17)
1. 前歯の被蓋, 配列			
前歯被蓋			
正被蓋	25	66	76
切端咬合	56	24	18
逆被蓋	19	10	6
	100	100	100
前歯配列			
叢生なしかわずかな叢生	3	47	76
中等度の叢生	53	24	24
重度の叢生	44	29	0
	100	100	100
歯列の正中線			
上下顎の正中線が一致	31	62	76
下顎の正中線が半歯以下のずれ	25	33	18
下顎の正中線が半歯以上のずれ	44	5	6
	100	100	100
2. 口 唇			
上唇のキューピッド弓			
良 好	25	52	30
わずかな変形	44	29	35
目立つ変形	31	19	35
	100	100	100
上唇の対称性			
対 称	28	43	35
わずかな非対称	56	33	41
非対称	16	24	24
	100	100	100
上唇の瘢痕			
目立たない	37	42	18
わずかな瘢痕あり	44	48	53
目立つ瘢痕あり	19	10	29
	100	100	100
3. 外 鼻			
鼻尖の形態			
良 好	34	62	70
わずかな扁平	34	33	24
扁 平	32	5	6
	100	100	100
鼻翼の形態			
良 好	38	57	47
わずかな非対称	38	19	53
非対称	24	24	0
	100	100	100
4. 顔つき			
良 好	32	29	53
わずかな中顔面の陥凹とオトガイの突出	34	52	29
高度な中顔面の陥凹とオトガイの突出	34	19	18
	100	100	100

(単位は%)

表 6 顔貌に対する満足度の比較

	10 歳群		15 歳群		20 歳群		年齢群間の比較		
	n	Median	n	Median	n	Median	10 歳と 15 歳	15 歳と 20 歳	10 歳と 20 歳
歯に対する満足度									
患者	32	4.0	21	3.0	17	2.0	p=0.48	p=0.16	*p=0.008
保護者	31	4.0	19	3.0	—	—	p=0.43	—	—
患者と保護者の比較	p=0.58		p=0.44		—	—			
口唇に対する満足度									
患者	32	4.0	21	3.0	17	3.0	p=0.99	p=0.95	p=0.91
保護者	31	4.0	19	2.0	—	—	p=0.039*	—	—
患者と保護者の比較	p=0.23		p=0.44		—	—			
鼻に対する満足度									
患者	32	4.0	21	4.0	17	3.0	p=0.98	p=0.52	p=0.56
保護者	31	4.0	19	3.0	—	—	p=0.014*	—	—
患者と保護者の比較	p=0.42		p=0.038*		—	—			
顔つきに対する満足度									
患者	32	4.0	21	3.0	17	3.0	p=0.93	p=0.62	p=0.78
保護者	31	3.0	19	3.0	—	—	p=0.99	—	—
患者と保護者の比較	p=0.75		p=0.94		—	—			

患者の年齢群の比較：Kruskal-Wallis test, Post-Hoc test

保護者の年齢群間の比較：Mann-Whitney U-test

患者と保護者の比較：Mann-Whitney U-test

*: p<0.05

表 7 口唇裂の有無と顔貌に対する満足度

	10 歳群		15 歳群		20 歳群	
	n	Median	n	Median	n	Median
患者						
口唇裂あり	28	16.0	13	15.0	15	11.0
口唇裂なし	4	12.5	8	11.0	2	10.0
口唇裂の有無の比較	p=0.21		p=0.27		p=0.65	
保護者						
口唇裂あり	28	15.5	12	15.0		
口唇裂なし	3	15.0	7	10.0		
口唇裂の有無の比較	p=0.92		p=0.075			

(p<0.05)

表 8 顔貌に対する患者の満足度と心理社会機能との相関

	10 歳群 (n=32)		15 歳群 (n=21)	
	r	p	r	p
歯に対する満足度	0.204	0.262	0.089	0.702
口唇に対する満足度	0.054	0.767	0.102	0.661
鼻に対する満足度	0.120	0.514	0.159	0.492
顔つきに対する満足度	0.025	0.893	0.319	0.158
合計(顔貌に対する満足度)	0.001	0.995	0.111	0.630

r：相関係数

(有意な相関なし)

p：確率

の状況でも 10 歳群と 15 歳群で良好な者がほぼ同じ割合であったことから(表 5, 図 2-1, 2-2), 保護者も著者とほぼ同じ認識であったことを示唆している。

3. 患者と保護者の満足度の比較

患者の鼻の満足度は, 保護者の平均 5.1 に比べて 15 歳群が有意に低く(表 6, 図 2-1, 2-2), 関心をよせる部位が両者で違っていたと推察される。外鼻の状況は, 15 歳群の鼻翼や鼻尖の形態が 10 歳群に比べて良好な者が多かった(表 5, 図 2-1, 2-2)。これは, 思春期には容貌を気にする程度が強まる⁹⁾こと, 20 歳前後の口唇口蓋裂患者は鼻に不満が集中すること⁷⁾から, 15 歳群における患者の鼻の満足度は保護者に比べて低かったものと考えられる。

4. 口唇裂の有無と顔貌に対する満足度

口唇裂のない者では自身の顔貌に対して肯定的に回答するが, 口唇裂がある者では否定的に回答する傾向がある¹⁵⁾。Thomas ら¹³⁾によれば, 10 歳群の口唇裂のある患者は口唇裂のない患者より強い不満を示すという。本研究では, 口唇裂の有無による患者と保護者の満足度には, どの年齢群間でも有意差がなかった(表 7)。この理由として, 上唇に目立つ瘢痕があった者がどの群でも少なかったこと(表 5, 図 2-1~3)が考えられる。

II. 患者の心理社会機能

学童期の口唇口蓋裂児では健常児に比べて自尊心が低く, 社会性が未熟であり^{9,10,16,17)}, 引きこもりがちで社会からストレスや不安を受けないようにしているとされている¹²⁾。また, 口唇口蓋裂患者であっても, 顔貌に対して満足している者は社会に適合しているが, 不満足な者では社会性が低いといわれている¹²⁾。Thomas ら¹³⁾は, 歯, 口唇, 鼻, 顔つきに対する満足度を合計した顔貌に対する満足度は, 心理社会機能と相関があるとした。しかし本研究では, 歯, 口唇, 鼻, 顔つきに対する満足度も, これらを合計した顔貌に対する満足度にも, 心理社会機能と有意な相関を示さなかった(表 8)。

心理社会機能には自己価値が影響しているが, 自己価値を規定するものは欧米と日本の子どもで著しく異なっている¹⁸⁾。欧米の子どもでは自己価値に最も影響するものとして容姿があげられるが, 日本では行動規範や対人関係があげられる¹⁸⁾。このように心理社会機能に影響を及ぼす自己価値が欧米と日本で異なることから, 本研究では顔貌に対する満足度が心理社会機能と有意な相関を示さず, Thomas らの報告と異なったものと考えられる。

結 論

1. 口唇口蓋裂患者の歯に対する満足度は 20 歳群が 10 歳群に比べて有意に高かったが, 口唇, 鼻, 顔つきに対する満足度には年齢群間で有意差がなかった。
2. 保護者の満足度は, 10 歳群の保護者に比べて 15 歳群の保護者では口唇と鼻に対する満足度が有意に高かったが, 歯と顔つきに対する保護者の満足度には患者の年齢群間で有意差がなかった。
3. 患者と保護者の満足度の比較では, 15 歳群で患者より保護者の方が鼻について満足度が高かった。
4. 顔貌に対する患者の満足度と心理社会機能には, どの年齢群でも有意な相関がなかった。

本研究に対して, 懇切なご助言をいただいた鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻社会・行動医学講座心身歯科学の梶原和美講師に心から感謝の意を表します。

本論文の要旨は, 第 46 回西日本矯正歯科学会大会(2001 年 2 月, 沖縄), および 4th Asian-Pacific Orthodontic Conference(2002 年 11 月, Singapore)において発表した。

文 献

- 1) Ross, R. B.: The clinical implications of facial growth in cleft lip and palate, *Cleft Palate J* 7: 37-47, 1970.
- 2) 富澤康彦, 幸地省子, 東福寺直道, 他: 唇顎口蓋裂者に発現する永久歯の歯数の異常(第 1 報) 発現頻度, *日口蓋誌* 14: 132-148, 1989.
- 3) 中山二博, 木佐貫聡, 黒江和斗, 他: 鹿児島大学歯学部附属病院矯正科における口唇裂口蓋裂矯正患者の 20 年間の推移, *日口蓋誌* 26: 339-348, 2001.
- 4) 坂井重信: 唇裂初回手術後の唇の変形, *鳥取医誌* 20: 23-26, 1992.
- 5) 高橋喜浩, 柳澤繁孝, 古川雅英, 他: 口唇・口蓋裂患者における鼻の変形に関する検討(第 1 報) 計測方法について, *日口蓋誌* 45: 955, 1999.
- 6) 鬼塚卓彌: 唇裂初回形成術時の外鼻手術, 形成外科 42: 489-504, 1999.
- 7) Noar, J. H.: Questionnaire survey of attitudes and concerns of patients with cleft lip and palate and their parents, *Cleft Palate Craniofac J* 28: 279-284, 1991.
- 8) Broder, H. L., Smith, F. B. and Strauss, R. P.: Habilitation of patients with clefts: Parent and child ratings of satisfaction with appearance and speech, *Cleft Palate Craniofac J* 29: 262-267, 1992.

- 主 任：伊 藤 学 而 教授 2003 年 4 月 10 日受付
2003 年 5 月 27 日受理

連絡先：竹田 彰
鹿兒島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専
攻発生発達成育学講座顎顔面育成学分野
〒 890-8544 鹿兒島市桜ヶ丘 8-35-1